# 義母とママ友、そして友人と４人で行った温泉旅行

「近くに良い温泉があるわね・・・」

ママが地元観光雑誌を開きながらつぶ

やいた。

ある日の夜、ソファで足を組んでテレビを見るママは顎の少し上を指で触りながら。

その温泉は最近出来たところらしい。

「この街もいろいろと変わってきているわね」

・・・・・・・・・・・・・。

少し片田舎ということもあり人口減少のところもあるのだが、

一方で観光地などを増やして旅行者も増やそうという流れもある・・・。

「でもさ・・・・・・」

俺はソファでママと同じようにぼんやりテレビを眺めながらつぶやいた。

「もっと遠くの県へ行ってみようよ」

・・・・・・・・・・・たまにはさ。

長距離列車とか夜行バスでとかが頭に浮かんだ。

そしてそのすぐ後に・・・・・

エッチなポスターの前に立ち・・・

ゲームセンターで勃起していた友人の
リョウタを思い出した。

リョウタは男子版ホットパンツ。

女に興味津々なのは彼だけではない。俺をはじめとりまく全員だ。

・・・・・・・・・・・・・。

ママとママ友、そして友人と・・・・・。

・・・・・・・・・・旅行！！！

早速決まった。

まだ若い俺たちにとってみれば元気いっぱいの合宿のようなもの。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

ママはにっこりと笑う。

「確か・・・・・近所のママ友さんが若い子に結構興味あるみたいで・・・・」

次の日、そのことを告げた友人のリョウタは大賛成。

「へーーーー。じゃあ俺もユリナさんのおっぱい吸ってみたいな」

・・・・・なんだか大人の世界って凄そうだね・・・・

その夜、俺とリョウタのペニスが狭いシャワールームでとんでもないことになっていたことは当然の流れ。

平凡なマンションの中階。

商店街、ビルなどが立ち並ぶ小さな街の片隅の話・・・・・・。

・・・・・・ママは料理中の薄ピンクのエプロンからリビングで卑猥なジーンズに穿きかえた。

換気扇の音。

台所には人参と玉ねぎの添えた美味しそうなデミグラスハンバーグが平たく白いお皿に入っている。

とても静かな静かな・・・・夜だった。

・・・・・・・・・じゃあママ、すっごく楽しみにしておくわね。

俺は、この夜の数日後・・・・

リョウタだけではなく他の友人などととある約束をしていた。

・・・・・・・グラウンドに行こう。

少し遠くて距離はあるところだけど自然はいっぱいなところだ。

・・・・小さな音楽隊がその横の小さな施設で練習をしているらしいよ。

その日、

軽やかなトランペットの音を聞きながら俺たちはボール遊びをしていた。

小雨がちらつく。

公衆トイレのところで少し雨宿り。

友人の一人、サキトは濡れた半ズボンをずらした・・・・・。

ちなみにサキトはリョウタのずっと昔からの幼馴染。

なんだかびしょ濡れになっちゃったよ。

困り顔。

そう言っているサキトは公衆トイレでずらしたズボンからエッチな部位が少し見えた。

雨は変わらずに降っている。

「そう言えばね・・・・・」

俺は一緒に旅行へ行く予定のリョウタに告げた。

快速のチケットはインターネットでママとママの友人が予約してくれていたらしい。

ボール遊びが終わりグラウンドから帰る途中も、リョウタは楽しみすぎて両手を空に上げて飛び跳ねて喜んでいた。

「旅行もさ、久しぶりだね。確か・・・・修学旅行以来かなぁ・・・・」

小雨の空を見上げている。

「そうだねっ！！でもさ、全然雰囲気って違うのかもっっ！！」

二人とも頬を赤らめ勃起中。

やっぱり・・・・オトナの女性二人と行く旅行は一味も二味も違うのかなぁ・・。

ハッピーな気分であぜ道を歩く。

帰りにさすがに濡れちゃうのでコンビニで透明の雨傘を購入したあとサキトの家へ立ち寄った。

「ママの友人がね・・・・・」

・・・・・・ママと一緒に温泉へ行ったらしいんだ・・・・・・。

実は過去にも女性二人でレズビアン旅行をしたことがあるらしい。

サキトは興味津々で俺の話に聞き入っている。

「へぇ・・・・以前にもそんなことがあったんだ」

俺は続けた。

「ママの友人の奥さんの太ももって・・・・・」

旅行へ行きたいという気持ちは増していく。

とにっかくムッチムチなんだって。

旅先の列車から見る窓の外の爽やかな景色が目に浮かんだ・・・・・

「景色って綺麗そうだよね・・・」

そんなムッチムチの太ももよりもさ。

はち切れそうな股間。

サキトはうずうずした様子で・・・・その日の夜シャワールームへ向かった。

シャワーは先日少しノズルが壊れ工事業者の人に修理してもらったばかり。

「業者さんっ！！シャワーのノズルってとっても大事だからきっちり修理してね！！」

部屋。時計の針は深夜を指そうとしている。サトキはシャワールームの湯気の中に包まれていた。

「旅行先か・・・・・・いいなぁ。俺も行ってみたいな」

・・・・・・・・・・・・。

だけどサキトはまだまだ。

羨ましがる係である。

そんなメンバーの学校ではエッチな雰囲気で持ち切り。

一足早く性を裸を知ることになるリョウタたちが・・・・そんな空気感の中で待ちきれずうずうずしている。

それから数日後、

ママとママ友のユリナさん、そしてその日はリョウタは用事で来れなかったため参加はなかったが、

俺と３人で具体案を出し合った。

「そうねぇ・・・・・・」

ママは下唇に人差し指を当てる。

「・・・・・・・・せっかくならお土産物屋や特産物とかさ、観光が盛んなところがいいんじゃないかしら？？」

・・・・・温泉ならこの街にもあるわけだから。

せっかく遠くへ行くんだもの・・・・。

・・・・・そして更に数日後、４人で更なる具体予定を立てる日がやってきた。

カフェテラスの片隅。

オフィス街が見える。

ママとユリナさんが隣り合わせに座り、
俺とリョウタが向かいの椅子。

この日はもっと具体的な計画を立てる。

ひざ丈ほんの少し下くらいのオフィススーツの女性たちが街をバッグを持って歩いている。生足が見える。

ママもユリナさんもミニスカートである。街の女性たちはミニスカートでない者はいない。

ムッチムチの太ももが見えている。

カフェ横の花壇。花が街を吹き抜ける風でほんの少し揺れている。

「昨日って雨だったわね？確か」

何気ない日常会話から。

グラスに注がれたアイス紅茶を飲みながらママ友のユリナさんが呟いた。

「ん？えっと・・・・・・」

ママ友のユリナは太ももを少し交差させた。

「そういえば・・・降ってたかも」

綺麗な指先がグラスにひっついている。

そして少し足をモジモジさせた。

「そう言えばさ、ちょっぴり昨日の夕方濡れちゃったかも・・・・」

自宅に到着し傘を折りたたむ途中。

マンションの前で濡れた肩と太ももで大変だった様子。

自宅のシャワールームで綺麗に洗い流したようだ。

シャワーは肩に流れ首筋に流れた・・・・

下は・・・・・。

もっと大変なことに・・・・・。

その余韻。カフェでくつろぐ今も太ももはムッチムチに潤っている・・・・。

話は旅行先の計画に移る。

ママ友のユリナは口に持っていったグラスをそっと木のテーブルに置いて言った。

「旅先はあそこがいいかも・・・」

ユリナは学生時代に行ったことのある場所を思い出した。

川が流れ・・・・・

登山など観光にも人気な旅行場所。

当時はバスで行った・・・。

冬になれば高い山の麓でスキー場にも

なる場所。夏は避暑地として人気である。

「・・・・・・・・・確かあそこって温泉もあったの！！」

嬉しそうにママ友のユリナはつぶやいた。

（体験版は以上になります。ご読了ありがとうございました）